

2015年3月10日

理工学部・専任講師

門脇 耕三

国際シンポジウム「サステナブル社会のまちづくり」 実施についての報告書

本国際シンポジウムは、別紙の概要書の通り、2014年12月1日、アカデミーコモンにおいて開催され、内田祥哉氏（東京大学 名誉教授・日本学士院 会員）、井上俊之氏（元 国土交通省 住宅局長）、ヘルマン・シュトレープ氏（ドイツ・都市計画家）、ロマン・ミラー氏（ドイツ・ゲーテ氏副市長）はじめ、日独の都市・建築分野の第一人者による講演や議論を行い、持続可能な社会の実現に向けての大変有意義な成果を得ることが出来た。

当日は、100名を超える参加者があり、この成果を広く発信することが出来た。

また本シンポジウムは、関係諸団体にも趣旨をご理解いただき、国土交通省、UR 都市再生機構をはじめ、多数の後援をいただくこともできた。

さらに、当日の議論をさらに広く発信するため、「明治大学国際学会・シンポジウム助成」に基づき、詳細な報告書を作成した。

以上のように、本シンポジウムは、当初の狙い通り、実りの多い成果を挙げる事ができた。

2015年3月10日

国際シンポジウム「サステナブル社会のまちづくり」概要

理工学部・専任講師
門脇耕三

開催日時：2014年12月1日（月） 9:30 から 18:00

会 場：明治大学 アカデミーコモン

主 催：明治大学 サステナブル建築研究所+国際連携本部

後 援：団地再生支援協会、UR 都市機構、国土交通省、都市計画家協会、東京自治研究センター、
東京市町村自治調査会、関西大学地域再生センター、文化日独コミュニティ

開催趣旨：

サステナブル社会構築に向けた「まちづくり」では、地域コミュニティの活性化を核とした都市環境再生の必要性がグローバルな共通認識となっている。わが国の場合、すでに都市や老朽化団地の再生に向けた行政的施策が用意され、幾つかのプロジェクトも試行段階に入っているが、現在の「まちづくり」ニーズに対応できるプランナーが十分には育っていない。一方のドイツ・EU は、サステナブル社会のまちづくりプロジェクトが多数実施されているが、現在進むグローバル化の中では、クオリティ・オブ・ライフの向上と効率の良いプロジェクトの推進が必要とされ、その具体策として、日本の“使い続けられる住環境” のコンセプトや建築産業化が注目されている。こうした現状認識により企画した本会議では、従来の日独の共同研究の成果を参照し、両国で進められる政策やプロジェクトを分析し今後の方策を探る。会議の成果を、報告書にまとめサステナブル社会の構築を指向するアジアなどの諸都市にも伝えられるようにする。

主な講演等：

「主催者挨拶」勝悦子 氏（明治大 国際連携本部長）

「来賓挨拶」C. H. フォン ヴェアテルン 氏（駐日ドイツ大使）

「使い続けられる住環境づくり」内田祥哉 氏（東京大学 名誉教授・日本学士院 会員）

「グローバル化とサステナブル社会のまちづくり」井上俊之 氏（前 国土交通省 住宅局長）

「日独比較の構図、サステナブル社会のまちづくり研究の系譜」澤田誠二 氏（団地再生支援協会）

「日本の都市計画システムの系譜、直面する制度・財政の改革」大村謙二郎 氏（筑波大学 名誉教授）

「ドイツにおける“サステナブル社会のまちづくり” の現状」 H. シュトレープ 氏（都市計画家）

「ドイツ NRW 州ボトロップ市のイノベーションシティ構想」 G. ロエル 氏（NRW ジャパン）

「団地再生のプロジェクト現場から」奥 謙仁 氏（市浦ハウジング&プランニング）

「新しい建築産業」松村秀一 氏（東京大学 教授）

「Gere2030」 R. ミラー 氏（ドイツ・ゲーテ市長）

「黒部パッシブタウン」小玉祐一郎 氏（神戸芸術工科大学 教授）

以上